

西水 美恵子

にしみず・みえこ＝75年ジョンズ・ホプキンス大学院卒、プリンストン大経済学助教授を経て、世銀副総裁。退任後、シンクタンク・ソフィアバンクのパートナーなどを務める。



法務大臣が死刑制度の存廃を問う勉強会の発足に言及したこのニュースに、ある絞首刑のこ

とを想った。1811年の出来事だから、日本は鎖国の江戸末期。世界経済の覇権は産業革命の最盛期を迎えた大英帝国が握り、米國が追い打ちをかけた頃だった。その年の5月8日正午、カリブ海域に浮かぶ小島群英国領地のバージン諸島で、一人の英国人が絞首刑に処された。200年経った今日も、島民がこの処刑を忘れることはない。罪人の名はアーサー・ウイリアム・ホッチ郷士。バージン諸島植民地政府の議員など、数々の要職にあった権力者だった。ホッチ家は、貴族と姻戚関係を

時評

2010. 8. 12

ウェブ

結ぶ英国上流階級の家柄で、バージン諸島最大の農地と多くの奴隷を所有する裕福な農園主だった。1763年、長男として島で生まれ育った彼は、名門オックスフォード大学に学んだ。軍人として青年時代を過ごした英国の社交界では、洗練された紳士と評判高く、将来を有望視されたと伝わる。

陪審員による裁判だった。判決は有罪。絞首刑を言い渡された。英国政府はすでに奴隷貿易禁止法を施行してはいたものの、根深い奴隷制度には歯も立たない時代だった。英国奴隷制度廃止法の成立より22年前、更に米國奴隷解放宣言より52年も前のことだから、衝撃的な判決だった。英国連邦カリブ海域総督が軍艦を率いて自ら

も、拍車がかかった。歴史の舵がゆっくりと、しかし確かに大きく切られ始めた。記録に残るホッチ被告の無罪申し立ては、当時の世相と主流思考を、鏡のように映し出している。「所有物なる奴隷を所有者が殺すことは、法律上人を殺すことより重い罪ではない」……。その絞首刑を語る時、英領バー

同じく人の命を殺めることは許されない。肌の色が何であれ、たとえホッチであろうとも、命は差別なく尊いのだ」……。植民地時代の数々の遺跡は、バージン諸島の白蟻とジャングルの餌になった。ホッチ農園とその邸宅も、今は跡形もない。が、一軒だけ、白蟻とジャングルから守り抜かれ、昔の姿を留める家が残る。この島に住むひとつのきっかけになった我が家は、隣接するホッチ農園から逃れ来る人々を匿い、ホッチ郷士の悪行告発に奔走し、裁判では証人台に立った農園主パシア家の人々の住居だった。今でも「パシア邸」と愛しまれるこの家に、差別を嫌う島民の強く優しい意志を感じる。バージン諸島に、死刑はない。長老たちは、これからも、子孫に伝え続けていくことであろう。「命は差別なく尊いのだ」と。

ある絞首刑

好む歪んだ性格が潜んでいたらしい。父の死後農園管理のために帰島したホッチ郷士は、奴隷を酷使する農園主として悪名高くなる。虐待が原因で死ぬ奴隷が増え、諷める人々も傷つき、紆余曲折の末に告訴された。裁判では、一人の奴隷をなぶり殺した罪に問われた。当時の世情から言うまでもなく、白人のみの

来島し、死刑当日には戒厳令をしいての遂行だった。奴隷労力で巨大な富を築く上流階級は、絞首刑のニュースに震え上がった。裁判の詳細を本国に報道した新聞記事は、ホッチ郷士の残忍極まる虐待行為をあらさまにし、読者の良心を揺さぶった。四半世紀に渡る活動が実を結ばず低迷していた英国奴隷解放運動に

ジン諸島の長老らは、口癖のように言う。「奴隷時代には価値などなかった我ら黒人の命が、ホッチの時代以来、白人と同じ値打ちになった」と。そして、若者たちには、こう付け加えることを忘れない。「間違えるな。死刑は正気の沙汰ではない。人の命を殺めることが罪だからこそ、その罪の償いとはいえず、

同じく人の命を殺めることは許されない。肌の色が何であれ、たとえホッチであろうとも、命は差別なく尊いのだ」……。植民地時代の数々の遺跡は、バージン諸島の白蟻とジャングルの餌になった。ホッチ農園とその邸宅も、今は跡形もない。が、一軒だけ、白蟻とジャングルから守り抜かれ、昔の姿を留める家が残る。この島に住むひとつのきっかけになった我が家は、隣接するホッチ農園から逃れ来る人々を匿い、ホッチ郷士の悪行告発に奔走し、裁判では証人台に立った農園主パシア家の人々の住居だった。今でも「パシア邸」と愛しまれるこの家に、差別を嫌う島民の強く優しい意志を感じる。バージン諸島に、死刑はない。長老たちは、これからも、子孫に伝え続けていくことであろう。「命は差別なく尊いのだ」と。